

# トランスジェンダー青年におけるアイデンティティ発達と適応の関連

人文社会科学専攻心理学プログラム  
廣 真琴

## 問題

### アイデンティティ

アイデンティティとは、「自分とは何者で、社会で何をして生きるのか」に関する自覚である (Erikson, 1968)。これは様々な自己の側面を統合し、自己が社会に受け入れられることで発達する (Syed & McLean, 2016)。そして、アイデンティティ発達は青年の適応にとって重要な役割を果たしている (Sugimura, 2020)。

### TG 青年のアイデンティティ発達と不適応

性別違和を抱えるトランスジェンダー青年 (以下、TG 青年) は、差別や偏見により社会に受け入れられた感覚を持ちにくい。こうした社会からの疎外はアイデンティティ発達と強く結びついている (McLean et al., 2017)。また、自己 (例：自身のマイノリティ集団に対する差別的態度の内面化) や社会などの様々な文脈でマイノリティ特有の慢性的なストレスに晒されていることから (Meyer, 2003)、TG 青年は非 TG 青年 (以下、CG 青年) に比べて抑うつや自殺等のリスクが高い (Connolly et al., 2016)。したがって、彼らはアイデンティティ発達につまずき、CG 青年よりも際立った不適応を呈している可能性がある。そこで本研究では、TG 青年と CG 青年におけるアイデンティティ発達と適応の関連を比較し、TG 青年がアイデンティティ発達に困難を有していることを量的に検討する。

本研究では、Luyckx et al. (2008) によるアイデンティティの 5 次元モデルを用いる。これはコミットメントに関わる「コミットメント形成」「コミットメントとの同一化」、適応的な探求の「広い探求」「深い探求」、不適応的な探求の「反芻的探求」から構成される。また、5 次元の組み合わせからアイデンティティ・ステータスを抽出できる (Luyckx et al., 2008)。例えば、このモデルを用いた日本語版多次元アイデンティティ発達尺度 (以下、DIDS-J) を作成した中間他 (2015) では、達成、早期完了、探索モラトリウム、無問題化型拡散、拡散型拡散の 5 つが抽出された。

本研究でもこのモデルに基づき、変数中心アプローチと人間中心アプローチ (von Eye & Bogat, 2006) という 2 つの視点から、TG 青年のアイデンティティ発達と適応の関連を検討する。両方のアプローチを用いることは、アイデンティティ発達の包括的な理解を可能にする (Crocetti & Meeus, 2015)。

## 本研究の目的

変数中心アプローチによって、TG 青年と CG 青年の間に DIDS-J の得点差があるのかを検討する。人間中心アプローチでは、まず TG 青年と CG 青年の間でアイデンティティ・ステータスの分布が異なるのかを検討する。続いて、適応指標の得点がアイデンティティ・ステータスと性別違和の有無によって異なるのかを検討する。

本研究の仮説は次の通りである。

仮説 1：TG 青年群は CG 青年群より反芻的探求の得点が高く、コミットメントや適応的な探求の得点が高い。  
仮説 2：両群において、コミットメントおよび適応的な探求は向社会的行動や人生に対する満足度との正の相関があり、反芻的探求は抑うつや行動の問題との正の相関がある。

仮説 3：TG 青年は CG 青年よりも不適応的なアイデンティティ・ステータスに分類される割合が高い。

仮説 4：どちらの群でも、適応的なステータスである達成、早期完了に分類された青年は適応が高く、不適応的なステータスである反芻的モラトリウム、無問題化型拡散、拡散型拡散に分類された青年は適応が低い。  
仮説 5：同じアイデンティティ・ステータスであっても、TG 青年群では向社会的行動や人生に対する満足度の得点が低く、抑うつや行動の問題の得点が高い。

## 方法

### 研究参加者

複数の LGBTQ コミュニティと大学において、18 歳から 29 歳の青年にオンライン上で質問紙調査を行った。分析は 338 名 (CG 青年 232 名、TG 青年 106 名) を対象とした。平均年齢は全体で 21.62 歳 ( $SD=2.68$ )、CG 青年群 21.16 歳 ( $SD=2.45$ )、TG 青年群 22.64 歳 ( $SD=2.88$ ) であった。

### 調査内容

**アイデンティティ発達** DIDS-J を使用した。25 項目 5 件法 (コミットメント形成： $\alpha=.87$ 、コミットメントとの同一化： $\alpha=.84$ 、広い探求： $\alpha=.79$ 、深い探求： $\alpha=.67$ 、反芻的探求： $\alpha=.70$ )。

**抑うつ** CES-D 抑うつ性自己評価尺度 (Radloff, 1977; 島他, 1985) を使用した。20 項目 4 件法 ( $\alpha=.91$ )。

**行動の問題** The Strengths and Difficulties Questionnaire (Goodman, 1997; Sugawara et al., 2006) を

使用した。25 項目 3 件法 (向社会的な行動 :  $\alpha = .73$ , 多動/不注意 :  $\alpha = .68$ , 情緒の問題 :  $\alpha = .74$ , 行為の問題 :  $\alpha = .37$ , 仲間関係の問題 :  $\alpha = .43$ )。

**向社会的行動** 向社会的行動尺度 (菊池, 1988) を使用した。20 項目 5 件法 ( $\alpha = .89$ )。

**人生満足度** 人生に対する満足尺度 (Diener et al., 1985; 角野, 1994) を使用した。5 項目 7 件法 ( $\alpha = .86$ )。

## 結果

仮説 1 について、性別違和の有無を独立変数、DIDS-J を従属変数とした多変量分散分析を行った。全ての変数で有意差が見られず、仮説 1 は支持されなかった。

仮説 2 は、相関分析の結果から一部支持された。具体的には、コミットメント形成、コミットメントとの同一化、広い探求および深い探求に人生満足度との有意な正の相関 (TG 青年群で  $r = .42$ ;  $r = .50$ ;  $r = .15$ ;  $r = .15$ ; CG 青年群で  $r = .35$ ;  $r = .45$ ;  $r = .32$ ;  $r = .28$ )、広い探求、深い探求に向社会的行動との有意な正の相関 (TG 青年群で  $r = .36$ ;  $r = .44$ ; CG 青年群で  $r = .29$ ;  $r = .39$ )、反芻的探求と情緒の問題に有意な正の相関 (TG 青年群で  $r = .39$ ; CG 青年群で  $r = .32$ ) が見られた。

仮説 3, 4, 5 を検討するために、クラスター分析を行った。その結果、適応的なアイデンティティ・ステイタスである達成、早期完了、そして不適応的なアイデンティティ・ステイタスである反芻的モラトリウム、無問題化型拡散、拡散型拡散の計 5 つが抽出された。

仮説 3 について、カイ二乗検定から全てのアイデンティティ・ステイタスで両群の割合に有意差が見られなかったため、仮説 3 は不支持であった。

仮説 4 では、各群においてアイデンティティ・ステイタスを独立変数、各適応指標を従属変数とした多変量分散分析を行った。アイデンティティ・ステイタス (Wilks'  $\lambda = .44$ ;  $F(4, 101) = 2.67$ ,  $p < .000$ ,  $\eta^2 = .56$ ) に有意な主効果が認められた。両群において、不適応的なアイデンティティ・ステイタスに分類された青年の方が向社会的行動と人生満足度の得点が有意に低く、抑うつと行動の問題の得点が有意に高かった。よって仮説 4 は支持された。

仮説 5 では、各アイデンティティ・ステイタスにおいて性別違和の有無を独立変数、各適応指標を従属変数とした多変量分散分析を行った。早期完了 (Wilks'  $\lambda = .78$ ;  $F(1, 73) = 2.23$ ,  $p < .000$ ,  $\eta^2 = .12$ )、反芻的モラトリウム (Wilks'  $\lambda = .78$ ;  $F(1, 86) = 2.82$ ,  $p < .01$ ,  $\eta^2 = .22$ )、拡散型拡散 (Wilks'  $\lambda = .70$ ;  $F(1, 78) = 3.71$ ,  $p < .01$ ,  $\eta^2 = .10$ ) で、性別違和の有無に有意な主効果が認められた。3 つ全てで TG 青年群の適応の得点が低く、不適応の得点が高かったため、仮説 5 は一部支持された。

## 考察

仮説 1 および仮説 3 が不支持であったことから、CG 青年に比べ、TG 青年が必ずしもアイデンティティ発達に困難を有しやすいとは言えなかった。本研究の TG 青年参加者の多くは、何らかの LGBTQ コミュニティへの参加を経験していた。彼らが自身のマイノリティ性を自覚し、それをコミュニティ内で他者に表明したり共有したりしていたことにより、今回のサンプルにおいては相応にアイデンティティ発達が進んだ状態だったと推測される。また、DIDS-J のような将来領域のアイデンティティ発達ではなく、ジェンダー領域のアイデンティティ発達を測定した場合であれば CG 青年との差異が見られる可能性がある。

仮説 2 では、TG 青年のアイデンティティ次元と適応の関連が示された。有意差の見られる変数が CG 青年と共通したため、CG 青年に必要なアイデンティティ発達支援は TG 青年にも同様に必要であると考えられる。

仮説 4 では、どちらの群でも適応的なアイデンティティ・ステイタスに分類された青年は適応が高く、不適応的なアイデンティティ・ステイタスに分類された青年は適応が低かった。よって、アイデンティティ・ステイタスと適応の関連の仕方は両群で一致することが明らかになった。両群におけるこの共通性を見出したのは本研究が初めてであり、学術的意義がある。

仮説 5 においては、TG 青年が不適応傾向を示すことは先行研究 (Connolly et al., 2016) と一致した。本研究はさらにそれをアイデンティティ発達と結びつけた点で、新しい知見を提供した。同じアイデンティティ・ステイタスであっても TG 青年群で有意に低い適応指標の得点が認められたことは、TG 青年が健康なアイデンティティを発達させる上で、彼らの背景に寄り添った支援が必要であることを示唆する。

本研究の限界として、サンプルにおける課題が挙げられる。今回は LGBTQ コミュニティとつながっていない潜在的な TG 青年から回答を収集することが難しかったため、TG 青年全体のアイデンティティ発達を捉えられていないことが懸念される。また、彼らの発達には画一的な質問紙調査で理解しきれない側面があったと考えられる。彼らの持つ背景は多様性に富んでいる。それを鑑みると、今後は質的手法によって詳細な聞き取りを実施することが必要である。

(主任指導教員 : 杉村 和美)

(副指導教員 : 梅村 比丘・若松 昭彦)